

ふんぞり(霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史・文化の再発見と創造を考える)

# ふんぞり、風

第11号 (2015年8月)

風に吹かれて (89)

白井啓治

『灼熱と百日紅の赤い花とアブラ蟬

禪一つで鍋焼きを喰らう』

今年エルニーニョの発生で冷夏となる、確かそんな予報が出ていた筈だが、梅雨が明けてみたら連日の猛暑。続く暑さにうんざりし、やけくそになって鍋焼きうどんを喰ってみるが、暑氣払いにはならなかった。

今年、沖縄戦の玉砕、広島・長崎の原爆投下、太平洋戦争の敗戦から70年である。我々が、この歴史から学ばなければならないことは唯一つ、戦争という人殺しはやってはならない、戦争で殺されることもならない、である。

如何に自国の防衛を掲げてでも人殺しは許されないし、殺されることも許されない。これは人類不変の規範である。

広島・長崎の原爆投下70年にあたり、人類から非人道的大量殺戮兵器である核兵器の廃絶を訴える声が例年にも増して大きくなってきた。その背景には、原爆だけではなく福島原発事故によって核エネルギー開発への不安、不信への問題意識が高まってきたこともあるのだろう。

連日の熱波に脳みそを撃たれて可笑しくなっ

しまったわけではないが、以前に良く言われていた原点的思考で兵器について少し考えを進めてみたいと思う。

昔、「ややッ！おのれ、飛び道具とは卑怯なり！」という言葉の使われていた時代があった。言葉が使われていたとは、その時代に置いてはその言葉は戦いの規範として生きていたという事になる。

飛び道具とは、弓矢のこと等をさしたが、時代が過ぎると鉄砲などが加わって来たが、当時はそうした飛び道具を使つての戦は人道に反すると考えられていたのであろう。

しかし、戦は勝つて負けた相手を支配することが目的なので、次第に飛び道具、闇討ちは卑怯とは考えなくなってきた。そして、兵器の行きついた先は化学・細菌兵器、原水爆となつてしまったのであった。

それでも、無差別大量に殺戮することができこれらの兵器は、国際的に禁止しようという動きが出てきたが、現在に至つてもまだ完全に廃止するまでに至っていない。

二十年ほど前にならうか。小生、化学兵器禁止条約を日本も批准することが決まる頃、その条約に関する広報と運用の概要についてのビデオ作品の脚本を書いたことがあったが、世界の戦地ではいまだに化学兵器の使用がされている。

これは、すべての兵器に置いてもそうであるが、国際条約を作り各国が批准したとしても、戦争の放棄がない限りなくなることはないと言える。こうして考えてみると、我が国の戦争放棄の憲法は制定の経緯を問う以前に世界に誇るべき平和遺産と言えるであらう。

戦争を放棄しない限り、兵器の製造は止まることはない。核兵器の廃絶も、化学兵器廃絶もないといえる。そして、兵器そのものに使つて良いものといけなものの線引きはない。機関銃での戦争は許されるが核兵器を使用するの戦争は許されないと理屈はないのだ。

そうであるならば我が国も核兵器も化学兵器も造つて自己防衛しよう、と志向する頭しかなければ、その国はもう亡びるしかないであらう。

安全、平和は牛尾について得られるものではない。鶏頭になつて戦争放棄を歩むところが安全、平和を得る最善の近道である。

安全と平和は、手弁当で構築する以外方法はないのである。いろいろな利権がらみで右往左往しながらも、少なくとも日本は戦争放棄の憲法のもとに70年を歩んできたのである。この事を確りと認識し、維持することが何よりも重要である。

姑息に希望はない。姑息は更なる姑息を生み負は連鎖し続ける。姑息な負の連鎖であってもそれを始めたという歴史上の事実の名を残すことが政治家の本望と考えるわけではあるまい。

成熟しようとする世論に幼稚過ぎる思考で歴史に名を残したいというのであれば、余りにも情けなさ過ぎる。折角の敗戦70年である。戦争放棄の重さを考える絶好の機会ではないだろうか。

## 「近代化」とは？

菅原茂美

結論から先に言う。「近代化とは、人類退化への早道」と言いたい。今の世の中、人口過剰で、いい事先取りの競い合いのため、余りにも「せめぎ合い」が、多すぎる。

人類が、平穏で安定的な繁栄を永続したいのなら、もっと、機械化による文明進化のスピードを緩めるべきである。

ビルの林立。地下街や交通網の過剰発展。人権を軽視した経済重点主義。愚かな軍事力の強化。更に便利過ぎる生活環境などは、人の精神と肉体の弱体化を招く。

地震・津波・火山噴火など自然災害の他、温暖化・大気や水の汚染など、人為的な環境破壊は、抵抗力を失いつつある人類には、耐えきれない。人類も絶滅危惧種へ近づきつつある。

近代化した国々では、うつ病・自殺・落ちこぼれ等が多くなり、富裕層と生活困窮者の差が拡大し、富の不平等は、争いを招く。これ以上、機械化文明に頼る近代化を急速に推し進め、地球環境の破壊が進めば、人類の未来に、栄光はない。

今が文明進化の「ターニングポイント」。「現在の地球は、未来の子孫からの預かりもの」という概念を、しっかりと頭に入れ、資源の浪費に歯止めをかけるべきである。それゆえ、人類はこの辺で、じつくりと、これまでの人類史を反省し、慎ましくやかに、今後の人類の歩むべき姿を、考察すべきである。

さて私は、現在進行形の「近代化」に、真っ向からクレームを付けるものではないが、人類の進む方向付けとして、未来のあり方を考えるとき、

果たしてこれまでの、利己的な遺伝子に支配された、今の今、俺さえよければそれでよい……という基本態度が、いつまでも推し進められれば、明るい未来はないと思う他ない。そんな事どうでもよい。遠い未来の事など考えても仕様がなない。今、人生を楽しむ権利を誰にも邪魔はされたくない。皆がそう考え、自分勝手に無定見な生活を続けていけば、そう遠くない未来に、悲劇が待っているという事を言いたいのである。

近代化とはなんだ？ 読んで字の通り。素直に受け止めれば、何の疑念も湧かない。バカと言えどそれまでだけれど、なぜ？……という疑問をすべてに對し常に持ち続けたいと、科学は進歩しないし、住みよい社会も発展しなくなるだろう。学校教育は、知識の詰め込みではなく、物事の根源を探索しようとする精神の涵養。即ち、ゴンポ掘りの習慣づけが重要と考える。それが、人類進化の推進力になると私は思う。

\*

さて「近代化」とは、一体何なのであろうか？ こだわりの分析を続けてみたい。近代化を成し遂げた国を先進国と言ひ、遅れた国を発展途上国と言ひ、なにやら差別化しているように見える。発展途上国だから仕様がなない！ という甘やかしが、地球温暖化ガスの排出規制を緩め、今や中国が世界一の温暖化ガス排出国になってしまった。人類の存亡にかかわる重大事項を、甘やかして、見過ごしてはならない。

近代化は人類に安寧をもたらす？ いやそんな事はない。環境を荒らし資源を枯渇化させ、この地球上で平等に生きていく権利を持つ他の動植物を、文明の進んだ人類がむやみやたら命を奪い去

って、根絶やしにまでする権利など、どこにある？

人類の未来への展望。大したつもりで大袈裟なことを言うと、罵る人もいるかもしれないが、この狭い地球上で、ひしめき合って暮らしつつも、明るい未来に希望を持って生きていくためには、全人類が、大局観を持って利己主義を捨て、仲良く暮らしていくことが肝心と考える。強い者が生き残れば、それでよい……というものではない。

さて、途上国は、かつての日本もそうであったが、近代化をめざして懸命の努力を続ける。明治維新後、西欧文化の移入に多大の努力を払ってきた。追いつき追い越せの号令の下、背伸びし過ぎるほど、改革を進めてきた。その極みが向こう見ずの暴挙「大東亜戦争」突入である。世界的情勢分析が甘く、己を過大評価する稚拙さ。その結果が悲惨な敗戦。幾多の国民や、関与諸国の人民にどれほど迷惑をかけた事やら……

その跳ね返りが70年経った今でも、重くのしかかっている。国土を踏みにじられた人々は永遠にそれを忘れる事などできないであろう。賠償代わりのODA援助など、政府間はこれで賠償完了。今後一切請求なしとして条約を結んでも、国民は、受けた幾多の苦痛は、千年経っても忘れる事などできないのかもしれない。

戦後70年過ぎた今、中国や韓国が、国内世論を纏め、政権基盤の堅持を図るため、その恨みを世界に宣伝し、歴史認識にこだわり過ぎる。中国は国交正常化(1972年)後、2008年までの36年間に、日本政府が「謝罪」を25回も繰り返してもなおかつ謝罪を要求し続けている。フランスがドイツに對し戦後、未来展望のため「寛容」により、和解した先例を無視し、未だにしつこく日本

を攻撃してくる。孟子のいう「仁義礼智の徳」の教えなど、本家本元なのに、どうなってるの？

私は沖縄県の人と酒を酌み交わした折、つい彼の口から出た言葉は『わが琉球は、薩摩の奴等にやられた。その後、明治政府により琉球王国も潰された』と。今、その滅ぼした日本を守るため、沖縄は、多くの土地を米軍基地に占拠されている。この複雑な心理、分かるか？…と。

\*

さて、近代化を遂げれば、国民がみんな幸せになれるのだろうか？ 先進国の交通機関は悉く高速化。巨大都市に人口集中。コンクリートジャングルを青白い顔した労働者や学生などが、何かに追いつめられたように虚ろな顔してセカセカ動き回る。地下深くまで街や交通網が伸び、自然は破壊され、資源は枯渇。環境破壊のため、野生生物は、絶滅危惧種が増えるだけ。天然の美は薄れ、人工的な「虚飾の美」が街を覆う。これで国民は優越感を抱けるのであろうか？

あの素晴らしい青空や、感動の星空など、知っているのか？ 早春の路傍の草花・木々の芽吹き。力強いタケノコの一斉発芽など胸躍る自然の営み。そして、ホトトギスやコジュウケイの鳴き声を知っているのか？ 子供の豊かな感性は、科学や芸術とも、自然の躍動から受ける事が多い。先進国は能力主義・成果主義で固まっている。投資に対する利益の回収如何で、物事が全て評価される。それに対する反動は二の次。これでは、コマネズミのように働かされる労働者がたまったもんじゃない。労働者は企業が利益を追求するための無機的な歯車の1枚ではない。うつ病や過労死など、いくらでも発生しているのに、ろくな補

償もされず、うやむやにされる。こんなのは先進国でも何でもない。滅びゆく古代都市の末路の姿としか言いようがない。国民が平等に、幸福観を共有する国家こそ真の先進国と言いたい。

\*

私がかつて赴任した中米ホンジュラス国では、ラテンアメリカという、実に楽天的な風土の国ではあったが、確かに国民の年収は日本などに比べ、格段に低いかもしれない。しかし、あの、のんびりしたセカセカしない日常生活。陽気で歌とダンスが無類好き。普通のサラリーマンが、夜遊ぶために、昼間タツプリ休憩をとり、退社時刻は活き活きしている。日本などの、残業で縛られ、強制労働させられている現実とは雲泥の差である。

かの国では裸足の子が多数。義務教育の小6を半数ぐらいしか卒業できない。父親は収入の多い他国へ出稼ぎに行き、そのうち、まともに家に送金する例は少ないらしい。そして、ついには行方不明となり、母子家庭が実に多い。そのような母親は、『子供は靴磨き・果物売りなどで家計を助けてくれる。亭主などいらぬ』と口にする。そうは言っても、決して悲惨に暮れているわけではなく、基本的には陽気で明るい民族性というのか、実に、おおらかである。

日本人が勤勉な事は世界でも有名である。しかし、よく考えてみると、日本は中緯度で、冬の厳しさに備え、雪の降らない時期にしっかりと働いて、食糧を蓄えておくという、古来からの生活習慣がそうさせたのだと思う。しかし熱帯という所は、「衣食住」は殆どそれほどの努力をしなくとも、身の周りに満たされている。寒くはないわけだから、衣類は適当でよい。作物は多毛作で、季節に

拘束されない。果物など自然界に豊富に実っている。マンゴウなど道端の木から熟した実が落ち、ごろごろ転がっていた。バナナなど木で熟した実がいくらでも手に入る。バンレイシ・マンゴスチンなど忘れられない。それらは、現地の人には、貴重なトロピカル・フルーツの感覚はない。有って当たり前の感覚である。家は雨風を凌げれば、適当でよい。何も汗水流して懸命に働く必要はないのである。

私も基本的には「ナマケモノ」の類なのか、できれば定年退職後は、こんな熱帯で、のんびり暮らしたいと強く思ったが、いかんせん、「治安」と「衛生」は、平和ボケの日本人では、耐えられそうにもない。住民は、むやみやたら銃を持ち、マリアなど熱帯病は、数えきれないほどある。

さて、かの国の人種は、白人とインディオの混血「メステイソ」が殆どである。白人の血が濃ければ、スペイン人と変わらない。酒場でフラメンコなどリクエストして、何度も踊ってもらったが、あの情熱的な眼差しや、長い美脚での妖艶な舞姿は、今でも脳裏から離れない。貧しくても決して卑屈ではない。

ある日、カリブ海ロアタン島の土産物屋のおばさんに、通訳を通じ『少しまける』と言ったら『今夜、私を抱いてくれたらタダでもいいよ』と平気でぬかす。それほど陽気で明るいのである。

\*

日本は、今でも自治体や政府の役人や議員達は視察と称し、海外へ飛び立つ。勿論先進国には、日本が学ぶべきことが多数あるかも知れない。しかし、成果主義や効率主義が主体で、国民の精神衛生がどのように保たれているか…など、奥深い

事までしつかり見学はできないであろう。表向き  
の姿は理想的でも、その裏側は、過酷な競争で、  
一歩落ちこぼれた人々が、どんな状況にあるかな  
ど、簡単には分からないはず。

何か大きな事業を取り入れ、俺達が与党の時代  
に成し遂げた「偉大な事業」などと自慢したがる  
傾向があるが、何年か経ち莫大な金を注いだ割に  
は、何のメリットも見られない。干拓や巨大ダム  
等、自然破壊も甚だしく利害が対立し、いつまで  
も争いの種をまいたに過ぎない事例もみられる。  
物によつては、たんなる役人の天下りのための構  
図であつた；など、いくらでも見られた。こうし  
て政府は、莫大な借金を積み重ねてしまつた。

さりとて、1980年の鈴木善幸内閣のように  
国の借金を増やさなため、無駄な事業を絞り過  
ぎたら、「無能内閣」と批判を浴びた。しかし、余  
計な事は徹底して省く決断は、絶対に必要な舵取  
りであると信じる。国益よりも省益が優先など、  
断じて許してはいけない。金もないのに、いい顔  
したくて大盤振る舞いを続けたその「つけ」を、  
未来の子孫に、決して残してはいけない。

それゆえ、海外視察するなら、先進国を良く見  
て、本当に良いものは受け入れ、奥が分からない  
ものには、手を出さない勇気が絶対必要である。  
そして先進国を視察した帰りには、必ず何処か発  
展途上国にも立ち寄り、現在、世界の隅々は、い  
かなる状況かをしっかりと目に留めるべきである。

なぜなら、自分さえよければ良いとする先進国  
の横暴は、いつかはその跳ね返りが、強烈に押し  
寄せてくるに違いないからである。現在の「イス  
ラム国」の反撃など、永年、西欧諸国が中東諸国  
を従えた反動のように見える。同じ地球上に生ま

れた人類だ。富が偏つては不平が起きるのは当然  
である。近代化はそのスピードを緩め、途上国が  
追い付いてくるのを手助けし、常にバランスを考  
えながら、地球規模でものを考えるべきである。

\*

人口問題をいかにせんや。現在世界人口は72億  
人。毎年、8500万人づつ人口は増えている。  
日本のように人口減に悩む国もあるが、一方増え  
過ぎて困り、一人つ子政策など、人権を侵害する  
ような国も存在する。もはや宇宙船地球号は満員  
状態。これ以上増えれば過剰積載。転覆しそうで  
ある。最近隣国で、そんな船が転覆したばかりで  
はないか。

この日本列島に縄文人は、遺跡の数から凡そ、  
10万人ぐらい住んでいたといわれる。4000体  
ほど調べた縄文人骨には、戦などによる傷跡は見  
られないが、大陸から一気に100万人も、押し寄せ  
て来た、いわば戦争難民である弥生人骨には、無  
数の傷跡があり、結核によるカリエス痕が存在す  
るといふ。縄文人は現在の日本人の千分の一で  
ある。これなら領土争いなど起こりつこない。ま  
た南北米大陸には、先住民が9千万人住んでいた  
が、コロンプス以降ヨーロッパから白人が押し寄  
せ、先住民の9割を殺害したという。諸悪の根源  
は、過剰な人口増加に起因すると考えられる。

現在の地球人口を養うためには、地球が1.4個必  
要と言われる。しかし、この太陽系惑星に、人が  
永久に住める星は、地球以外には存在しない。そ  
れゆえ、他の惑星への移住などナンセンスな話で  
ある。すぐ内隣の金星は炭酸ガスが95%の温室効  
果で、表面温度460℃。90気圧は地球の水深900m  
に相当。雲は水蒸気ではなく硫酸である。1日が

1年より長く太陽は西から昇り東に沈む。地球並  
の水や空気は存在しない。地球と双子星と言われ  
るのに、これほど違う。これでは生物が住めない。

されば外隣の火星はどうか。空気は炭酸ガス  
95%に酸素0.13%だが、希薄なため、表面温  
度は17℃〜マイナス123℃。1日の温度差は100℃  
を超えるという。質量は地球の10分の1。1日は  
24時間37分だが、1年は686日。何より水分はあ  
るが、液体では存在しない。有機物のスペクトル  
は観測されないので、生命は存在しないと思われ  
る。その他の惑星は灼熱地獄か極寒で、地球を逃  
げ出そうにも、行く先は太陽系には存在しない。

\*

地球上の諸々の問題の原因は、私は「人口過剰」  
にあると考える。国民が豊かになるためには、食  
糧生産はじめ、工業化や教育・福祉のための適切  
な面積が必要である。土地が不足するから、近隣  
を侵略する歴史を繰り返してきた。日本の戦国時  
代、「石高」を増やすため、どれほど戦いを積み重  
ねた事か。それが全世界どこにでも見られた。

人類が平穏に暮らしたいのなら、まず人口を、  
しっかりとコントロールする知能を持たなければな  
らない。野生の動物は、適正なポピュレーション  
を保つため、人類のように無謀な異常繁殖は、自  
らしっかりと押さえている。肝心の人口抑制がで  
きない人類は、あまりにも低能過ぎると言わざる  
を得ない。限られた土地に適正規模の人口。そし  
て、人類の未来を見通し、自然破壊を徹底的に制  
御した、過剰すぎない文明の発展。それが、全人  
類が平穏に暮らさうするバイブルと信じる。

かすみがうら市出島地区(5)

○二つの村社(1)

出島の宍倉城(菅谷氏)のあつた周りには2つの村社格の神社がある。

今まで日の当たらぬところを掘り起こしてきたが、少しは大きめの神社も歴史を知る上では紹介しなければならぬだろう。ひとつは宍倉にある「鹿島神社」で、もう一つは安食(あんじき)にある「太宮神社」である。一つずつ取り上げてみるより二つを比べてみると面白そうである。

まずは宍倉鹿島神社である。県道沿いにあるので、すぐにわかる。大きな木々が茂っているのが気になる神社だ。神社の入口には「宍倉総鎮守」の文字が書かれている。

由緒書きによれば「宍倉・成井・下軽部・上軽部」の四ヶ村の総鎮守というが……。

鎮守の森などというようにその土地を守護する神様ということのようだ。しかし、近くの成井には八坂神社があつて、お囃子(ひょうこ)が有名なのだ。

石岡の祭りにも継承されているように思う。この辺も、もう少し調べる必要もありそうである。鹿島神社であるので、当然鹿島神宮の神「武甕槌尊(たけみかづちのみこと)」が祀られている。しかし、この出島地区には「鹿島神社」という神社がたくさんある。これは土地柄なのかもしれないが、その中心となるのはやはり本鹿島と言われる牛渡(うしわた)の鹿島神社ではないかと思つている。

宍倉鹿島神社の本殿は江戸時代の延宝元年(1673)年に再建したもので神社の創建は大同4年(8

09)という。

大同年間に創建されたといわれている神社は数知れないが、受け継がれているにはそれなりの理由があるのだろう。もつとも坂上田村麻呂が蝦夷征伐に勝利して都に戻ったのが802年。清水寺の地を賜ったのが805年。その後右近衛大将になったのが大同2年(807)年。この頃の流れが何かありそうだ。

宍倉地区は室町・戦国時代には「菅谷氏」が支配し、その後佐竹氏、江戸時代になり土浦の土屋氏も影響を及ぼしたと思われるが、どうも水戸黄門(光圀)の名前があちこちに出てくるのを見ると隣の石岡市井関地区等と同じく水戸藩の飛び地だったのかもしれない。この鹿島神社の南側が「大手(おおで)」という土地の名前で、宍倉城の大手門側ということか。

この宍倉鹿島神社の近くに「別雷神社」がある。これも気になる名前である。

○二つの村社(2)

安食(あんじき)太宮神社です。「おおみや神社」と読みますが漢字は大宮ではなく太宮です。

この安食(あんじき)という名前ですが、いきさつがよくわかりません。昔安食氏という氏族がいたらしいのですが、これは人の名前は後からで、土地の名前からそう呼ばれるようになったと考えるのが普通です。

安食の町には「安飾小学校」「安飾郵便局」等という名前がありますが、こちらは「あんじよく」と読むようです。さてどんな歴史があるのでしょ

う。現在はかすみがうら市(2005年)ですが、その

前は霞ヶ浦町(一九九七年)。その前は出島村(一九五五年)です。出島村は下大津村、美並村、牛渡村、佐賀村、安飾村、志士庫村が合併してできた村で、この土地は安飾村と呼ばれたようです。

安飾村は明治22年(一八八九)の町村制が実施された時に出来た村で、この時には安食村・柏崎村・岩坪村・下軽部村が合併して出来た村で、昔(古代から中世)の郷の名前をつけて「安飾」となったといわれます。

すると、「安飾」は古代・中世の名前を復活させた名前だということです。これらのほうが古いのもかもしれません。そして、それらのことを見てきたのがこの神社なのでしょう。

この神社も県道沿いにありますので、すぐ分かりますが、境内にこの神社の由緒が書かれた説明板がありません。

創建は大同元年(806)といわれているそう、宍倉の鹿島神社より三年早い。まあどこもはつきりはわからない。

書かれていたのは県指定文化財の銅製の「鰐口」で直径が33cm程のもので、室町時代初期(1403)年の銘があるの作とされています。

ここでも水戸黄門さんが出てきます。元禄4年(1699)年に徳川光圀が参拝され、由緒等を聞いて、安食、柏崎、岩坪、堂山、成井横町の五ヶ村の総社とするように命があつたそうなのです。そうすると、やはり宍倉の鹿島神社より古いように思う。

鹿島神社は「水戸光圀によって御神体を寄進され、明治6年に村社となり、宍倉・成井・上軽部・下軽部の四ヶ村の総鎮守となった」と書かれていたので、昔を調べるならやはりこの太宮神社の方

ですね。

宍倉の鹿島神社も街道沿いにありますが、この街道は少し高いところを通っていて、鹿島神社の脇から霞ヶ浦側に下りていく道があります。その途中に古墳もあるのですが、昔の地形では霞ヶ浦（流れ海）が見下ろせる突端に位置していたようです。そして、この鹿島神社から安食の太宮神社に来る途中は一旦下に下がってまた高い所へ登っていくような地形で、こちらも少し高台の丘の上なのでしよう。拝殿の龍の彫り物も見事です。歴史的な何かを感じます。

祭神は「大宮比売命（おおみやひめのみこと）」とその他、国づくりに関係した神様が沢山祀られています。また御神体は青銅鏡だそうです。本殿は保元元年（1156）2月7日日本社造立、天正2年（1574）正月修理の棟札があるそうですので昔は大きな勢力を持っていた神社だったのだと思います。昔の安食氏についてはよくわかりません。永享7年（1535）に梶原氏の知行地となり、その後小田氏の家臣「菅谷氏」の領地となっていたそうです。戦国末期に佐竹氏に小田氏が敗れると、水戸光圀の参拝までのしばらくの間荒廃が進んでしまったようです。

さて、この菅谷氏ですが、小田氏が佐竹氏の軍門に降ったあと土浦城を奪還して最後まで戦って、野へ逃れ、江戸時代になって徳川家康に厚遇され、徳川旗本となって家系は存続しました。また境内には明和6年（1769年）の石灯籠もあります。

さて、この神社も歴史にふさわしい神事（流鏝馬）が旧暦9月19日に行われていたと言いますが、いまは止めてしまったようです。狛犬もどこかい

かにもそれらしい風貌があります。

### ○しし土手

宍倉の鹿島神社の記事を書いていて気になってまた近くに行ってきました。そこで見つけた「しし土手」という看板です。

場所は成井の八坂神社の手前です。「史跡 しし土手」と書かれているだけで何の説明もありません。昔築かれた土手が続いています。

この土手は猪などから農作物を守るための土手だそうで、この成井のしし土手は長さが1km程あったそうです。そして途中に何箇所か土手を削って開いた部分を作り、そこに落とし穴をしかけたようです。

このようなものがあるのを知りませんでした。時代は18世紀前半だといえます。

せっかく看板があるので何か説明看板も掲げていただきたいものです。

宍倉地区ですので、「宍土手」なども書くそうですので、宍倉、宍戸も猪にも関係した名前なのではないか。近くの梨園の白い花が咲き始めました。日当たりの良いところはかなり開いてきました。もうすぐ一面白い花で覆われるでしょう。

### ○成井八坂神社

西成井にある八坂神社は石岡に来た時より気になっていたところで、昔一度見に来たことがありました。しかし、最近はまだあまり通らないので立ち寄ることもなく久しぶりにやってきました。

天慶二年（939）の創建だそうです。藤原秀郷（後藤太）が東征の際、宝剣を納めたといわれています。この八坂神社は「成井ばやし」というもの

が代々伝えられて残っています。

これは石岡のお祭りには山車の上で演じられるものにも伝わっているように思っています。もちろん石岡の三村や染谷でのお囃子が伝わっているでしょうが、ここは意外に知られた存在のようになっています。山車に花火をしかけた祇園囃子です。

拝殿も立派な構えで狛犬もどこかひょうきんな表情をしています。現地の看板には「西成井集落に伝わる成井ばやしは、以前から「成井のひよつとこ」といつて親しまれ、現在は毎年7月下旬の土・日曜日の八坂神社祇園祭に奉納されています。はやしの調子は「シンバカ」「シチヨウメン」「ニンバ（仁羽）」の三種類があり、シシ舞・キツネ踊り・ひよつとこ・おかめの四段が踊られます。」と書かれています。

ここ西成井の囃子は石岡の囃子連よりも前から囃子連があったそうです。やはりユーモラスなひよつとこ踊りが有名だそうです。

唐風の拝殿の手前の彫刻は見ごたえがあります。比較的新しいとは思いますが、何か意味しているものなのでしょう。

また奉納された額絵もかなり古い物と最近のものがあるようです。

さて、この八坂神社の手前の方、宍倉に「別雷神社」というのがあるので行ってみました。こじんまりとした小さな神社です。「べつらいじんじや」なのか「わけいかづちじんじや」なのかわかりません。

別雷（わけいかづち）神社は京都の上賀茂神社（賀茂別雷神社が正式名称）が有名です。ここもきつと上賀茂神社から分霊されたものではないかと思えます。

こんもりした小山。1本の大きな木は桜の木です。訪れたときは花がまだひらひらと散っていました。鳥居をくぐると石段があり、小山の上にお宮がひとつ。お宮の脇の看板には貞応二年1270年とある。

#### ○出島の椎

出島の内陸部の下軽部にある「長福寺」に樹齢700年の「出島の椎」の木が残されていると知って、やはり見ておかねばと出かけてみました。

この「出島の椎(しい)」と呼ばれるだけありものすごい幹の根の張り方です。すでに上の方の枝が一部ありません。スタジイの木は300年〜400年程のものは古い神社等で威容を誇っているのですが、700年というのは初めてです。これも千葉県の匝瑳市(そうさし)にある安久山に樹齢1000年のシイの木があるそうですので、それには及びませんが、すごい木々気です。

根元に祠が置かれており、この木の周りにはたくさん石仏が取り囲んでいます。この石仏ですが、どうやら弘法大師様のようなのです。

調べてみると、「長福寺住職の正応上人が1767年(明和4)、四国遍路から持ち帰った札所の砂、土、お札を根元に埋め、弘法大師の石造88体をシイの木の周囲に並べ「木の周りを回ればお遍路さんと同じご利益がある」と伝えた」と書かれた記事がありました。

この巨木から湧いてくるパワーを囲んで、まわりの仏様がお経を上げているのでしょうか。このようなものは初めて見ました。一見の価値ありでしょう。

#### ○長福寺

「出島の椎」のある「長福寺」を紹介します。

寺の説明文には「長福寺は、真言宗豊山派の寺で、かつては十万石の格式を供え、南大門を有し、本堂は間口十八間、奥行十間、九尺の縁廻し、総けやきの荘厳な寺院でしたが、度々の火災により、宝篋印塔と山門、そしてこの「出島の椎」に昔日を偲ぶばかりであります」と書かれています。

末寺の数もかつては36もある由緒ある寺だったといえます。この山門も趣のある歴史を感じます。横から見ると厚みのある屋根の形はとて面白いです。

宝篋印塔は鎌倉時代以降に密教系のお寺では各地に建てられているそうです。

この長福寺は以前の出島散歩で細野再兵衛と百姓一揆の話を書いた時に出てきました。

一揆の首謀者として25歳の若さで処刑された「貝塚恒助」の墓があると思つてやってきたのですが、よくわかりませんでした。

他の記事などによると近くにある墓地に葬られているようです。いま寺は申し訳程度の小屋があるだけです。この寺に来るには途中ゴルフ場の入口前を通り越して少し言つたところから少し狭い道を入つた突き当りになります。

このような場所になぜあつたのだろうか。昔は道も続いていたのだろうか。

車社会になると、このような歩く道は廃れてしまい、昔の道のつながりが見えなくなってしまう。入口の近くの民家に咲いていたダリアが綺麗でした。雨が上がったばかりの時でもまだ水滴がついています。

(記事は2012年4、5月のものです)

#### 県指定文化財(5)

兼平智恵子

指折り数えて待ちに待った石岡のおまつりまで後一ヶ月余りとなりました。今年(一九七〇)は九月の十九(土)、二〇(日)、二一日(月、敬老の日)の三日間で、おまつりでの中心的な役割を担う今年の年番町は仲之内町です。水戸信用金庫石岡支店の前、石岡駅から西に向かう八間道路を挟んで真向いに広がる町内です。称徳天皇の神護景雲二年(七六九)創建と言われている古い歴史を持つ福徳稲荷神社が鎮座しています。祭礼には「御仮殿」を設け御祭神をお迎えする大役があります。

仲之内町の祭礼の出し物は伝統的な幌獅子で、その銘から確認できる石岡最古の獅子頭(市指定有形民俗文化財)で、重さ二四キロもあり、頭上に大きな金色の宝珠型の珠をつけているのが特徴です。そして「富田町のささら」「土橋町の獅子」について公奉行列での露払いを務めます。今年も悪霊退散そして皆さんに元気を与える勇壮な舞いをご披露してくれる事でしょう。今回の県指定文化財のご紹介は例大祭が行われる常陸國總社宮の杜宝の中から「常陸総社文書」よりご案内します。

#### ○常陸総社文書 有形(古文書)

指定 昭和五八・三・一八

治承三年(一一七九)から天保年間(一八三〇〜一八四

二)に至る記述がなされていて縦四〇センチ、横五〇センチの絹表紙で折本書帖一冊に表装されている。これは安政二年(一八五五)森興惣兵衛他二名が表装を加え箱に収めたもので、指定になっているのは全部で五〇通あり、他に類を見ないものが多く中世社会の実像を知る上で価値の高い文書

になつてゐる。

治承三年（一二七九）、約八〇〇年前のこと、總社宮の社殿を建てた際に、常陸国の主要神社が社殿や鳥居などの造営を負担しました。二の宮の静神社をはじめ、三の宮の吉田神社や筑波神社など有力神社の名が「総社文書」に連なつてゐるようです。八郷地区の方野村と高友村からは鳥居が寄進され、境内には十以上の社殿と五つの鳥居があつたことが読み取れたそうです。国府の総鎮守として大きな力と神威を持つ総社宮は国司時代以後も代々支配者の篤い崇敬を受けてきた事が分かります。

総社文書一部のご紹介でした。

### ○巴形銅器

有形（考古資料）

平成十・一・二一

昭和六三年宮平遺跡（現常陸風土記の丘）の発掘調査で発見された青銅器で全径約五・〇センチ、重量が約一四グラム、半球形の本体に脚が右回りに四本ついています。元来は五脚であつたが発見時には一本欠けていたそうです。

裏側には紐と呼ばれる穴が空いており盾などの装飾品として使用されていたものと考えられる。また巴形銅器のモデルは奄美諸島近海に生息するスイジガイとされており、今でもこの地方では魔除けの意味を込めて、家の軒先に下げているそうです。

巴形銅器は西日本で出土が多く、関東では少なく、特に住居跡からの発見は珍しく貴重であつて、この銅器は現在常陸風土記の丘の資料館に展示されています。しかしとても残念です、平成二三年の三月十一日、東日本大震災の時に壊れてしまい、

現在は複製品が展示されています。発見当時は県内で、初めての出土でしたがその後平成十一年に大洗でも住居跡から出土されました。

常陸風土記の丘では「ふれあい広場」の宮平遺跡の石のモニュメントの近くに（平成十五年位まで）、巴形銅器の説明板が立っていました。出土場所は弥生時代と古墳時代の住居の重なりあつたところからの発見ということでした。

巴形銅器は魔除けとして、装飾品として高官が盾等に使われたものといわれ、出土の多い西日本では古墳時代のお墓からの発見が多く見られるそうです。巴形銅器が発見された宮平遺跡は長期にわたつて人々が生活の営みが行われたところで、祭祀的な遺物として手づくね土器など多数確認されている住居跡に巴形銅器という特異な遺物が発見され、どの様な意味が隠されているのでしょうか。

どうぞ皆さん常陸風土記の丘の資料館において頂き古代人との交流も深めて見てください。土、日、祝日は館内に石岡市歴史ボランティアの会員がお待ちしております。今回は二件ほどのご紹介でした。

参考資料 石岡の遺跡・石岡市の文化財・石岡市教育委員会発行

石岡一〇〇物語 いしおか一〇〇物語刊行会

・まああるい心灯し ほおずき燦々 智恵子

### 黒い本立て

伊東弓子

あれは六月の古文書の勉強会で「人相書の布令」を読んでいる時だった。ある武士が、身分の高い

男と言ひ合ひの末、刃物三昧となり相手を傷つけてしまい、お尋ね者となつた話だった。勉強は差置いて侍の家族の話になつた。長男は家督を継ぐが、次男、三男はどうしたろう。仕事があつたか、婿の口でもあればよいが、等あれこれ話は続く。長男も能力のない時はどうしたか、病弱の時はどうなつたのか、二、三男が町の中を威勢よく歩く姿や、うっ憤遣る瀨ない気持ちを打付けて喧嘩になつたり、事を仕出かすことも多かつたらうと、次から次へと蹴り合うボールのように話しては弾んで行つた。やがては集団化して地域で力をつけていったのだろうか。ごろつき、博奕打ち、やくざ、任侠者とよばれる者が生まれ育つていったらう。力がついて土地の代表者の如く、「清水の…」「大利根の…」「潮来の…」「赤城の…」と呼ばれていったのだろうか、歌まで出てきて暫くぶりに大笑いしたひとときだった。

その夜、父の話しとあの箱のことを改めて思い出していた。実に不明瞭のことが多すぎるが、ずっとずっと気に掛ることの一つだった。私が娘の頃、だった。父が話しをしてくれた箱のことだ。

「遠い昔、明神町に住んでいた（やくざ、ごろつき、ならず者）が、父親に借りた金の型にくれた（本箱・本立て・本入れ・本棚）だそうだ」

話しを聞いたのもこの時一度、見たのもこの時だけだった。箱を縦に使い書類が重ねてあつた。大切にしている感じを受けたことをはっきり覚えてゐる。大きさは、高さ半間位、巾や奥行きは半間の半分位だった。色は全体が黒ずんでいた。塗つた色とも見えず、自然に黒ずんだにしては黒すぎる。木肌はざらざらしていた。釘のあとはなかった。木製には違いないが特に上等の物でもない

ようだった。どの位の金額を貸したのか、期限はどの位だったのか分からない。それ以上に、言葉の表現を全く覚えてのが残念だ。本箱だったか、本立てか、本入れか、本棚だったか。そしてやぐざといったか、ごろつきかならず者だったか父の表現を覚えていない。そしてその言葉は祖父が父に話した言葉そのものか、など時代によって地域によって使い方も違うんじゃないかと思うと知りたくなるがその術がない。

今は何処にあるのだろうかあの箱は。弟が管理していると思うがその中聞いてみよう。時々思い出して、あの箱が気になるのは、あの箱の背景に人が、自然が、歴史が見えてくる楽しさがあるからだろうと思う。

いつ頃、その男と祖父は出会ったのだろう。祖父は明治二十年代後半にこの地に廃寺だった寺復興の為に来た。二十才後半だった。復興作業、生活の問題、地域との係り……と並大抵の苦労ではなかった頃出合ったのかな。当時は人様に工面して上げる程の力はなかっただろう。男もどんな理由で借りる羽目になったのか、何で返せなかったのか：無限大に興味湧いてくる。「ひと事だ」とこゝも厚かましいものかと躊躇いもするが前に進んでいこう。

男の住んでいた明神町とは今の大宮神社周辺のことだ。当時人家は三軒ははつきりあったことがわかる。境内には右に神主の住居と社務所を兼ねた茅屋根の建物が私の子供の頃にもあったから当時もあつたらう。鳥居の左側に「いなもと」という駄菓子、煙草屋があり、道は社の森添いにある。手洗池を通って森の中から外山、亀塚、飯塚へ行く通りがあった。手洗池の前から左に行く道は府

中へと続く道だ。今のJA玉里、玉里小学校、玉里中学校辺りは畑や森で、桑原ヶ丘の台地だ。谷津田を越えた西の部屋、南の松山一帯は寺との係りの強い地域だ。雷電山から明神さまへの参道は今の福祉センター一帯は松林の中にあり、南は下玉里に、明神さまの前で右は小川、左は高崎と何れも細い道がくねくねと続く時代だったろう。塙は人家は多く寺とのかかわりの古い所だ。明神町という呼び名が気になる。八百万の神々が御座す所だからかな、と笑われそうなことを考えてみた。その男は何処に住んでいたのだろうか。明神さまの地内か、木小屋、掘立小屋、いやいや一軒構えていたのかも、それとも大屋敷に住んでいたのかも知れない。

その男は何をしていたのだろうか。一年を通して祭りや縁日が多かった頃だ。仕切ったり、世話役をしていたのかも知れない。博打に手を出していただろうか。高崎台の古墳の影は持つてこいの所だとか。勝負が終われば古墳にあるものを高浜へ持つて行って酒代にしたとも聞く。外山の台の畑と林の間では自転車坂を降りてくるお巡りの姿が見えるから、見張りの合図で隠れるのに好都合。いつの世も変わらないものだ。それとも用心棒にでもなっていただろうか。高崎の無住の寺では、住みついた男を逆に地元の人達が頼んで、部落の見廻りや境内、寺の掃除をして貰っていたと聞く。そうしてまず大切にされた所も時代変れば荒れ放題、地せぶりの憂き目にもあうことになる。真面目に人の手伝いをしてきた人間だったかも知れない。百姓仕事に精を出し、田も畑も厭わず、雨にも風にも負けずに出てはいつも長続きしなかったとか、漁の手伝いにいそいそ出かけていっ

ても、山仕事に張切っていたても、猟師と一緒に野山を走つても、要領が悪かったのか注意されると喝となつて大騒ぎ、大喧嘩を起すこと度々だったとか。生傷が絶えなかったのは常、袋叩きに合うような事もあつたか、飲み屋の皿洗いをしても割ることが多く残り酒をよばれる楽しさにも有り付けなかったか、最後は泥棒をしたか、(人殺しまでは想像したくないが)淋しい別れようだった。

父は、『親父の言うことには、最後は明神町を引き廻しの上、連れて行かれてしまった。あれからどうなったんだらう』と、あの男の身を案じて言った一言だけだった。父と祖父が幾つ位の時の会話だったのかも分からない。父が大人になつてからの事だろうと思う。

父は明治の終り頃の生まれ、物心ついた頃は大正期、自分も餓鬼大将でこの辺りじゃ羽振りをきかしていたんだから、そういう人が近くにいれば一度や二度合つてもおかしくはないし、知らない筈もない。やがて岐阜へそして東京へ行くからその間のことだったのか、など言っていたが分からずじまいだ。

私は私の生まれる四十五、六年前の事を思うだけだった。

男が祖父にうまい話しをもつて話している様子がみえる。

男が祖父に懇懇と説教されている姿が聞える。男が泣きながら訴えている姿が見える。

二人で唾を飛ばして言い合っている姿が見える。男と祖父は、同じ方向を向いて煙管煙草を吸っている幸せそのもののひとときもあつたらう。男も祖父も友の一人と互いに思っていたらうか。生きていくってことは、一人じゃなくて人とか

かわって生きている楽しさを感じていたことだろう。二人ともいないが、黒い本立ては現存していて、後世の者の役にたっている。ちかい中に合いに行こう。

## 行方市と「常陸国風土記」

小林幸枝

みのくれで、彫刻家の宮路久子さんの作品展のチラシを見て、行きたいと思っていたが、用が出来て行けなかった。それで、宮路さんの「常陸風土記」の像がたつ行方市に出かけてきました。

### ①橋郷造神社(たちばなこうぞうじんじや)

倭武尊が、東国征伐に船で相模国から上総国に渡るときのこと。海が荒れ狂い、今にも船が沈みそうになりました。女の人が船に乗っているの、海の神が怒ったのでした。弟橘姫(おとたちばなひめ)は、自分から生贄となつて嵐の海に飛び込みました。すると、荒れ狂っていた海が静かになり、倭武尊たちは、無事辿り着くことができました。

それから何日か後、弟橘姫のさしていた筭(こ)がいが、霞ヶ浦に流れてきて岸边に打ち上げられました。流れ着いた筭を守るかのようになり、鳥が群らがついていました。一説には筭が羽を生やして飛んできたとも言われています。その筭が飛んできたところを筭崎と名付け、神社を建てて筭を納め、弟橘姫の霊を祀ったのでした。

### ②鴨宮(かものみや)

すめらみことが梶無河(かぢなしかわ)から部睡(く

にのさかの)の地までお出でになられたところ、鴨が飛んで渡るのを見て、矢を射られるや否やただちに鴨が落ちてきたので、その地を「鴨野」というようになったといえます。ここには宮路さんが創られた弓を引く倭武尊と弟橘姫の銅像が立っています。

### ③梶無川

岡より降つて、大益河を躰(ふね)乗つてよる時、棹梶が折れてしまったので、この河の名を「無梶河(かぢなしかは)」という。この川は、茨城・行方両郡の境をなしている。梶無川のほとりには「倭武尊」の銅像が立っています。

### ④椎井池(しいのいけ)「夜刀神(やとのかみ)」伝説

継体天皇の時代、箭括氏麻多智(やはすのうぢまたち)という人が、郡役所の西の谷にある葦原を開墾して新たに田をつくった。その時「夜刀神」が群れをなしてやつて来て邪魔をした。この地では、蛇を「夜刀神」といった。夜刀とは「谷人」であり谷津周辺の湧水近くに居住する人たちと考えられる。麻多智は、山の登り口に境界を立て神社を建て「夜刀神」を祀った。

その後、孝徳天皇の時代になって、壬生連麿(みぶのむらじまろ)初代行方郡の地頭がその谷を占領して池に堤防を築いたとき、「夜刀神」が再び現れ、椎、槻に昇つていつまでも立ち去らなかつたので、「目に見える一切のものは、すべて打ち殺せ」というや蛇は逃げ隠れてしまった。

池には湧水が出ていて、きれいな水をためていました。上にある神社に行くと、後ろに「夜刀神」があります。

### ⑤曾尼駅家(そねのうまや)

堤賀里より北方に「曾尼の村」があります。昔、曾禰毘古(そねひこ)という佐伯が住んでおり、それが地名になりました。ここには駅家がありました。駅家とは大化二年石岡に国府がおかれ、役人が巡検の時、馬を乗り継ぐところであり、官民の宿舎などが置かれたところです。

### ⑥堤賀里(てがのさと)

荒原神社の鎮座するこの台地に、古くから人々が住みつき、縄文時代中期にはすでに核となる集落がつくられたとされています。永くこの地方に住みつき大和朝廷に抵抗した「手賀(てが)」という佐伯が住んでいたと風土記に記されています。堤賀里は、この人の名にちなんで後世に里の名にしました。ここには、助け合いながら逞しく生きる家族の像が立っています。

### ⑦玉清井(槻野の清泉)

倭武尊が、東国を巡視の途中にこの槻野の清野においてになり、水辺で手を洗い玉で井を清められた地なので、この泉を「玉清井」と呼ばれるようになりました。

### ⑧化蘇沼稻荷神社(けそぬまいなりじんじや)

昔、寸津毘古(きつひこ)と寸津毘売(きつひめ)という土着の豪族が住んでいました。倭武尊の命令に従わなかつたため寸津毘古は切り殺されてしまった。残された寸津毘売とその一族は、白旗を掲げて許しを乞いました。尊は哀れみを覚えてその家族をお許しになりました。ここには、豊かで平穏な里を護り祈る寸津毘古

寸津毘売の像が立っています。

宮路さんの彫像に誘われて行方の風土記めぐり  
をしてみました。皆さんも是非行方風土記めぐ  
りをされてみてはいかがでしょう。

### 【風の談話室】

8月9日、ギター文化館で行われる、里山と風の  
声コンサートは、広島・長崎の原爆投下、そして  
終戦70年を迎えるにあたり、平和への祈りをテ  
ーマに、映画「ひろしま」の上映会と詩の朗読と  
ギター演奏会が行われる。この時に朗読する詩を、  
ヨイシヨの会の市川紀行氏に依頼したのであるが、  
その詩「未来に託す詩2015夏」を、此処に紹  
介したいと思う。

### 《ヨイシヨ広場》

未来に託す詩 2015 夏

市川紀行

はるかな道を 確かな道を  
敗残の非情の泥をぬぐい 理想を込めて歩んできた  
この国のすがたがいとしい  
奪われた自由と人間を取り戻し 人間の平和を歌い  
抗いながら 信じながら  
ともかくもしっかと抱き続けた敗戦70年

よみがえるふるさとの山河  
よみがえる文化の息吹  
もう人を殺さない 殺されない  
もう奪わない 奪われない

1千万の犠牲のうえに

その内外の倒れた魂のうえに

新しい価値に満ちた新しい祖国をつくるのだと

2015年 夏

この愛しむ真珠の輝きを未来に託そう

だがそれは幻 70年後の幻影だろうか  
いま暗雲の黒い光が向かってくる

おお わがひとよ、見えないか その牙の光が  
70年の人間の正義と平和を葬るために

昭和20年8月15日

わたしたちはこの日を決して忘れない

オキナワの非業の嵐

ヒロシマの白い道

ナガサキの黒い雨

決して忘れてはいけない

B 29の無差別爆弾 火の海の東京のまち

焼け焦げた住まいの柱が墓標のように立ち並ぶ

異郷で 海原で 烈火の孤島で散ったひとびと

無謀なジャングルの行軍で飢えて倒れたひとびと

侵略の鉄のうなりに奪われた異国の命

おお 戦争よ戦よ 誰が始めるのか

そして誰が死んでゆくのか

侵略と暴虐に駆り出された

赤紙1枚の兵士 我らが父よはらからよ

命令のもと 真空世界の引き金を引く

人がもつれる 人が倒れる

誰が敵なのだ 誰が味方なのだ

そして誰が死んでゆくのか

おお 狂おしくも世界を巻き込んだ

大東亜の幻想と狂気

おお わがひとよ 見えないか

いま権力を握るひとりの男が

大東亜のその夢を追っているのだ

思想もなく哲学もない 干からびた脳髓

透けて見える下品な野望と自己陶醉

ナチスがだどつた破滅さながらに

70年を崖っぷちで救い支えた

いのちなる憲法

それをば破り踏みにじり

人々を恫喝する愚かさよ

その恫喝にひるむものなどいない

命生む女性たちはなお立ち上がる

「戦争はいらない 戦争はさせない」

いまこそ今こそ8月15日を忘れない

あたたかな人間の血潮で

冷徹な歴史の眼力で

私たちはこの日を決して忘れない

私たちは決して忘れない

けれども私の胸は苦しさにゆがむ

本当に忘れないか

いま本当に忘れていないか

忘れようとしていないか

忘恩のたくらみが声高く 時に声をひそめて

暮らしの経済を狙い撃つとき

その声はいうだろう

忘却こそ新しい日本の道だと

そして正規の軍隊を持つ「普通の国」こそ

日本の新しい発展の道だと

執拗に続くその声の不気味さ

邪魔者を消せ 9条を消せ

栄光の国防軍の旗をかかげよ

闘わねばならぬ この専制の暴挙

おお 友よ 若きともびとたちよ

忘れないでおくれ いつも思い出しておくれ

たとえば私や親しき白井ひろじの世代は過ぎ去って

ゆく

私たちの前の世代が過ぎ去ったように

日本の戦争を戦後を肌身で知る世代は消えるのだ

忘れないでおくれ 思いだしておくれ

「私がいちばんきれいだったとき」と

茨木のり子は歌っている

「私がいちばんきれいだったとき

街はがらがらと崩れていった」

その嘆きと怒りはときに死よりも激しく燃える

すべての女性たちから戦争が奪ったもの

「私がいちばんきれいだったとき」

戻れない 返せない戦乱の思いに

かきむしられた青春は年老いてもう誰もいない

哀しみの枯葉ばかり絶え間なく散ってゆく

友よ

かけがえのない若きともびとたちよ

きみたちの誰かが云った

戦争は自衛隊が行くのでしよう

戦場のリスクは自衛隊が負うのよ

自衛隊はそれが仕事でしょう

私たちに関係ない 死ぬのは彼らだ

ああ そうではない そうではない

殺してはいけない 殺されてはいけない

そうやってしまったとき

それは君たちのところへ還ってくる

招集札状 赤紙の時代が還ってくる

物言えぬ 人間が檻樓になった時代が還

ってくるのだ

憲法9条がそれを守った

政府をしぼり 政治家をしぼり

あのベトナム戦争でも 戦場に隊員を送らなかった

一人も殺さない一人も殺されない

70年 そんな日本の奇跡

ひとびとの心がつくったその奇跡

世界がうらやむ日本の奇跡

読んでくれたまえ「きけわだつみの声」を

必死に残した死にゆく若者の手紙

その底に流れる思いをつかむのだ

聴いてくれたまえ 特攻飛行士の声を

「あいつは死んだ、俺は生き残った」

その底に流れる思いをつかむのだ

大陸の荒野の宵闇が不気味にせまる

ああ俺はどうしてここにいいのか

思うのは乳飲み子のあどけなさ

おさな妻の頼りなさ

銃をささげた見張りの眼に流れる北斗の星

赤紙の弟はこの荒野ですでに果てた

妻よわが子よ 凱旋の日まで待っていてくれ

俺は帰る 生きて帰る

だが確かなのは転戦の軍靴の響きだけ

戦地からの便りはもう届かない

運命の魚雷が来た 輸送船の舳が沈む

南の孤島に流れ着く流木ひとつ

しがみつく少年兵に駆け寄った白髪の老兵

故郷はあまりに遠い ふるさとの田よ 畑よ

老兵は少年兵の最後の声を聴いた

母さん 母さん 母さん

おお、わがひとよ 若きともどちよ

あくまでも青いオキナワの海

あくまでも透き通る辺野古の海

「オキナワ県民かく戦へり

後世格別の高配賜らんことを」

島民を巻き込み、保身の楯に駆り出し

絶命の淵に追い立てた

ひめゆりの少女たちは爆弾を抱き

断崖の岩礁は赤く染まった

「オキナワ県民かく戦へり」

島民をあおり死に導いた軍人太田少将

最後の電文を東京に打ち覚悟の死を死んだ

「後世格別の高配賜らんことを」

70年 ひととは忘れないというのか  
いま米軍の占領地さながらに

軍国の植民地さながらに  
辺野古の海に強権のうねりがうねる

島民の願いは届かず

県知事を門前払いにする無礼者

その無礼者の猫なで声がメディアに流れる

「オキナワの人々の心に寄り添って進みます」

恥ずかしげもなく 何という茶番だろう

その取り巻きがまたも沖繩をあげつらう

この国の墮落 貧弱な精神のありか

「沖繩の新聞をつぶせ」「糧道を断て」

本土の都合こそ沖繩のすべてとへつらいの亡

者がほざく

「後世格別の高配賜らんことを」

今この言葉が虚ろに響く

オキナワの人々はいうだろう

「格別の高配」など要らぬ

普通の人権、民主主義を約束せよと

おお 友よ 若きともどちよ

見てみたまえ この無礼者と諂いの貧相な顔

と顔

彼らは 彼らの子どもたちは決して戦場にゆ

かぬ

権力の陰に隠れ、園遊会でワインを飲むのだ

美ゆら海に 美ゆら海が似合う

不沈空母ではない 不沈の防波堤ではない

あざやかなりし 琉球の王国

でいごの花の高きにはなやぐ和みの島よ

守礼の道に

でいごの大樹はまた何をみるのだろう

忘れないと誓った約束に重ねて

ふりかえれば われらが戦後70年

それはいつも何かに守られていた歲月

そうだ

掲げた理想が

傷つきながら 時に邪魔者にされながら

そうだ 理想の旗ははためいていた

歴史にもしもはない

もしもはいつも人々の悔いと願望に満ちている

それはもしもの選択が

権力の保身の意志にあるからだ

もしも ああ

あの「ポツダム宣言」をそのままに

軍国政府が受け入れていたら

ヒロシマの原爆投下はなかったのだ

ナガサキの原爆投下はなかったのだ

いかにアメリカが 原爆を試したいと思っても

いかにアメリカが 帝国の破滅を意図していても

おお わがひとよ 友よ 若きともどちよ

2015年8月 戦後70年の選択は

まだ変えられぬ歴史の「もしも」ではない

憲法を守るのか 捨てるのか

人を殺しに戦争に行くのか、戦争をしない国でいるのか

「もしもあのととき、もしもあのととき」

歴史の審判は間もなくされるだろう

ききたまえ この夏の日

平和の大地に人々の声がひびいてくる

ゆるぎない未来に託す詩のひびきが

あなたたちの 子どもたちの約束の歌だ

新しい世代の たしかな歌声が響いてくる

1億年のしあわせを

1億年の平和に返せ

懐かしい約束のように

太陽は輝かなければならないのだ

ヨイシヨの会の田島早苗さんが、今年初めに手を

骨折され、投稿をいただけなくなっていました。

回復されてまた美しい言葉の紡ぎを投稿いただけ

ることを心待ちしております。

《読者投稿》

養生日記（詩二編）

堀江実穂

感謝

朝目覚める

新鮮な空気を胸いっぱい吸い込む

命を実感する

そして命あることに感謝の気持ち湧いてくる

私の当面するすべてに感謝したくなる

美味しい食事ができること  
花を見て美しいと思えること  
太陽の光を浴びて一日のエネルギーをもらった  
気持ちになれること

小鳥たちの屈託ない声を聞けること  
風を体感じられること  
歩きながら地面の反発を感じる  
指で鍵盤をたたくとピアノの音がすること  
私の当面することのすべてに感謝の気持ちが湧いてくる

私は生きている  
私は感じている

### 希望

人はどん底まで落ちてしまおうと  
希望を想うことが辛くなってしまう  
しかし、底の底まで落ちてしまおうと

もうそれ以上下を見ることが出来なくなつて  
上を見上げることが出来る様になる  
顔をあげて上を見ると胸が反り返り力が湧いてくる

俯いて下を見たり、後ろを振り返つてばかりいと辛いことばかりが思い出されると胸を反り返して上を見ていると、思い出すことも嬉しかったこと、楽しかったことが蘇ってくる

過ぎた過去に希望を見ようとしても見ることは叶わない  
顔をあげ太陽を受けたとき夢をみる嬉しさが湧き起こってくる

自分に言い聞かせる

さあ、背筋を伸ばして胸を張って希望をうたおう

堀江さんから携帯メールが届く。暑さの所為なのだろうか、最近調子が悪いのだという。

体調が悪く、精神状態が不安定になったら、それを言葉に書けばいいと返事を打つ。

自分を言葉に落とすと、反発する人も共感する人も出てくる。しかし、その時点で自分は孤独でないことを知ることが出来る。

自分の想いや考えを言葉に落とすことの意味とは、人は独りではないことを実感できることではないだろうか。

今日は嬉しい投稿を頂いた。いろいろな風が吹いてくれることを願って命名したふるさと風の会ではあるが、一つして余所からの風が吹き込んでくれることは嬉しいことである。

私の国府巡り 塔 京都府精華町 今井 直

のどかに広がる田園風景の手前には菜の花畑、遠景のなだらかな木立の中に五重塔が紺碧の空にそびえている。何気なく開いた観光ガイドに載っていた一枚の写真だ。周囲の景色に負けない屹然とした塔の姿に、私は目を奪われた。備中国分寺とある。

自分の目で見たい衝動にかられ、思わず岡山まで出かけてしまった。写真と同じ位置に立つと、秋晴れの中、頭を垂れた稲穂の絨毯が目の前に広がり、薄紅色のコスモスが揺れていた。そして遠くには時の移ろいを見守るように備中国分寺が泰然と建っている。これは私に新たな趣味として、とてつもなく魅力ある世界が芽生えた瞬間であっ

た。今から九年前のこと。

地図を見ると、国分寺の周辺には幾つかの史跡が点在する。隣接地には国分尼寺跡、そして所在地である総社市の市名の由来である総社宮。地方自治体の区分では隣りの岡山市だが、備中国一宮の吉備津(きびつ)神社もほど近い。神社の参道正面には、当地出身の首相で五・一五事件により凶弾に倒れた犬養毅が、生前に揮毫した社号標が建っていた。ガイドブックにも載っていない思いがけない発見に、歴史好きの心はワクワクした。境内には社殿を結ぶ全長四百メートルの長大な廻廊がある。地形に合わせて龍のうねりのように延びており、観光客の人気スポットだ。単なる観光ではもつたない。とりあえず史跡探訪を記録してみよう……これが私の国府巡りの始まりであった。

資料を集めて調べていくうちに、見逃したことがたくさんあり、再度、再々度と訪れ、結局、備中国分寺は今まで五回も通っている。季節によって桜やひまわりの花・緑の水田など、風景は姿を変えて出迎えてくれる。その後、国分寺に関連する国庁・総社・一宮、五畿七道の天平古道や駅家(うまや)、『万葉集』にまで調べる範囲が膨らんでいった。国府巡りは熱狂的な鉄道ファンに比べると、遙かにマイナーな趣味である。どこも空いているのが取り柄だが、礎石を愛しげに眺めては手を添えて悦に入っていると、怪しい奴と好奇心な目で見られることもある。

平安中期までに多くの国分寺が時代の流れで衰退し滅亡した。千三百年ほど昔を知る手がかりは、土器や瓦・木簡などの出土品や、遺跡に残存する基壇や礎石、各地に残る「府中」や「国分」などの地名ぐら이다。開発などにより大きな礎石すら

散逸し、行方が分からない場合がある。石岡の国分寺境内にある塔の心礎も、道路建設のため他所から移されたと聞く。こういう情報が明らかであればよいが、捜し当てるのに苦労することもある。

仏塔は仏舍利を祀るための建物で、鉄骨製もあるが木造の塔に限れば、最古は7世紀末建立の斑鳩・法隆寺、最大は京都・東寺(約55メートル)、屋外で最小は奈良・室生寺(約16メートル)、また京都・八坂の塔のようにランドマークとなっているものも多い。耐震の工夫があり、先人の知恵・技術に驚かされる。

個人的に最も美しく立派だと思うのは、奈良・興福寺の五重塔(約51メートル)だ。明治初期、廃仏毀釈により興福寺は存亡の危機にさらされた。僧侶全員がリストラされて春日大社の神官に転職したり、しばらくは廃寺となった。お堂が次々と破壊され、五重塔も売却され薪にされかけたが、近隣住民の反対で焼却されずに済んだ。仏教文化の破壊が徹底されていたら、世界遺産に登録されることもなく、大切な宝物を失っていたであろう。

奈良・櫻井市の談山(たんざん)神社に、世界唯一の木造の十三重塔(約17メートル)があり、秋には周囲の紅葉に映えて誠に美しい。神社に塔はヘンだが、元々は多武峯寺(とうのみねでら)という寺だった。明治の神仏分離令により神社と改称された後も、寺院建築をそのまま使用し藤原鎌足を祀っている。斑鳩・法隆寺の三重塔もたいへん美しい塔だ。しかし四重塔・六重塔というのではない。いま解体修理中の奈良・薬師寺の東塔は一見すると六重塔だが、これは各層の屋根の下に裳階(もこし)が付いているからで、裳階は屋根に数えないため、実際には三重塔ということになる。

古代中国の陰陽道では、奇数は「陽」つまり「吉」、偶数は「陰」と考えられ、現代でも桃の節句・菖蒲の節句・七夕・菊の節句など奇数月の奇数日がめでたい日とされている。また割り切れる偶数だと別れるから、ご祝儀で二万円を包むときには、一万円札一枚と五千円札二枚で奇数にする風習がある。仏塔が三重・五重・七重の塔なのは、このような考えからだ。

奈良時代の出来事を記した『続日本紀』には、聖武天皇の発願による国分寺は「国の華であり、必ず良い場所を選んで永久に」とある。凶作疫病を防ぎ、五穀豊穡、国家安穩を祈るための国家プロジェクトであった。しかし、国府それぞれの財政状況、国司の関心や熱意の度合い、現地の技術者の能力の差などにより、諸国が足並み揃えてとはいかなかったらしい。

詔(みことり)に「国ごとの国分僧寺に七重塔を一基建造せよ」とあるが、現存する七重塔は一基もない。だが、塔址の礎石の配置や規模から、高さが60メートル位の塔が建っていたと推定される国分寺遺跡は多い。上野・下野・上総・相模国などでは、見事な七重塔の復元模型を資料館や公共の場で展示している。尼寺に塔は建てられなかった。

創建当初の総国分寺・東大寺では、大仏殿ははさんで東西に、二基の七重塔が並び立ち、高さはいずれも百メートルほどあったという。落雷や戦乱で焼失したが、原寸で七重塔を復元したことがある。

EXPO'70(大阪万博)において、鉄骨造りのエレベーター付展望台目的のパビリオンという形でよみがえった。万博終了後は解体され、東大寺より移設の要望もあったが、資金上の問題から最上部の相輪(そうりん)のみ寄贈された。今も高さ約23メートル

の相輪は、大仏殿の東隣で金色に輝いて訪れる人々を見守っている。

《一寸一言・もう一言》

|| 一寸一言 ||

十字軍が行く(二)

打田昇三

ローマ教会と、後にギリシア正教になる東方のビザンチン帝国教会とは、西暦一〇五四年に決別の看板に関わるから両者とも引け無いのである。ローマ側では東方教会の救援要請を無視しても良いところ「ヨーロッパからの聖地巡礼者が迫害されている」となれば放っても置けない。ローマ教皇ウルバン二世は、ビザンチン側の腹を探りながら「聖地救援」という絶好の機会を利用してビザンチン帝国及びコンスタンチノープル教会にもローマ教会の影響を強めようと考え、渋々ながら内心は喜んで救援要請に乗ったのであろう。

ゲルマン系民族が主であった中世ヨーロッパ社会では、有力な諸侯から推された王がキリスト教総本山であるローマ教会から帝冠を受けて皇帝になった。しかし皇帝になったら誰もがナンパワで居たいと思うであろう。当然ながら此の曖昧で根拠の無い制度が「カノッサの屈辱」事件のような権力闘争に発展する。

それは兎も角、ウルバン二世は西暦一〇九五年十一月にフランス中部クレモンテで開かれた宗教会議の席上で「聖地エルサレムの危機」を訴えた。…と言うよりも「聖地の奪回」を扇動した。冷静に考えればエルサレムがヨーロッパ諸国の領土で

有ったことは無いのだが宗教的感覚が昂じてくる  
と人間は思い込みの世界に浸り分別がつかない。

先ず、夢だけで武装した数万の民衆が「十字軍」と称して東へ向かった。しかし戦闘能力のある騎士の数は五千に届かず、多くの者は女性を含む巡礼団、サービスで言っても刃物などを持った武装巡礼団でしかなかった。無計画の集団であるから途中でトルコ軍に遭遇し阻止されて全滅した。

それに懲りずに一〇九六年から一二九一年まで延べ七回とも八回とも言われる東方遠征を繰り返したようであるが得られたものは何も無い。多数の者の流血と根深い怨恨だけが双方に残された。それでも何度目かの十字軍は、十万人のイスラム教徒を虐殺して聖地エルサレムを占領したらしいから遠征の成果が有ったと言うべきなのか、しかし八十八年後にはイスラムの指導者英雄サラディンがエルサレムを奪回した。サラディンはシリアの首都ダマスカスに眠っているが、今のシリアは十字軍時代のような戦闘地帯に戻っている。

第二回以降の十字軍は生活苦から同じキリスト教徒を襲ったり、ベネチアに利用されて商売をしたり無駄な遠征を繰り返して自滅した。十字軍関連の産業は「キリストが汗をふいた手拭」とか「磔（はりつけ）になった十字架の破片」など貴重な？ガラクタが良く売れたらしい。作られた破片の合計が十立方メートルになったと言う。十字軍遠征の先頭に立った国王や皇帝が血に飢えた狼のように無意味な戦闘を続けた中で、神聖ローマ帝国のフリードリヒ二世だけは、話し合いによるエルサレム解放を実現したらしい。やはり平和か戦争かは、必然的に起きるのでは無く、其の時代の指導者による要素が多いらしい。その

点、元気が良すぎず指導者が居る日本が少し心配になってきた：フリードリヒ二世の死後に、エルサレム一帯は三度目のイスラム化を迎えて現代に至るが、一時的にしても話し合いで複雑な領土問題が解決出来た前例である。国際紛争に憎しみと報復だけが常道化される昨今に、顧みる価値のある歴史であると勝手に思い込んでいる。

### 太陽の寿命

菅原茂美

太陽は天の川銀河の恒星の一つであり、半径約70万km(約の意味は明確な境界がない)。質量は地球の33万倍。全ての惑星・衛星や準惑星などを加えても、太陽系全質量の99.86%を占める。推測年齢は46億歳で地球と同じ。現在、中心部に存在する燃料の水素を50%「熱核融合」で使い果たし、寿命のほぼ半分を過ぎたと考えられる。

太陽は天の川銀河の中心から<sup>2</sup>、万光年の位置にあり、銀河の中心を<sup>2</sup>億年かけて一周する。太陽が前回、今の位置にあった頃、地球上では爬虫類から分岐して、「哺乳類」が誕生した。

さて太陽が発する光のエネルギーは、中心核で4個の水素原子が核融合し、1個のヘリウム原子に変換される際に発生するものである。1秒間に430万トンの質量が主にガンマ線という電磁波に代わり、周囲のプラズマなどと衝突し、17万年かけて「緩やかな電磁波」に変換されて、太陽表面まで浮かび上がり、「太陽光」として宇宙に放出され、地球では生命を育む事となった。

太陽誕生の経過は、今の位置にあった先代の恒星が「超新星爆発」を起こし、燃えカスの星間物

質が徐々に再集合し、現在の太陽系が形成されたと考えられる。現在の太陽は先代よりも質量が少なかったため、再び超新星爆発を起こして「無」に帰する事はない。水素燃料を使い果たせば、ヘリウムの核融合が始まり、「赤色巨星」となり、それも使い果たせば<sup>123</sup>億年の寿命を終え、炭素や酸素の燃えカスからなる冷え切った「白色矮星」となって、さびしく佇む事となる。

更に我が天の川銀河のお隣さんは超巨大な「アンドロメダ銀河」である。これが曲者。天の川銀河に秒速300kmの猛スピードで急接近中。今から40億年後には、我が天の川銀河と衝突し、完全に吸収合併され、太陽も地球も、どうなる事か、皆目見当がつかないとの事である。

### ギター文化館

## 2015 CONCERT SERIES

- 9月5日(土) 福田進一 ギターリサイタル
- 9月29日(火) フラメンコギターコンサート
- 10月3日(土) 長谷川きよしコンサート
- 10月4日(日) 河野智美 ギターリサイタル
- 10月18日(日) 村治奏一 ギターリサイタル
- 11月15日(日) 朴葵姫 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35  
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

「政府開発援助」のその後

菅原茂美

戦後70年特集として新聞の記事に、政府開発援助(ODA)の経過が示されていた。それによると、サンフランシスコ講和条約(1951年)で、大半の国が対日賠償請求を放棄したのは、日本を西側陣営に取り込み、早く復興させたいとするアメリカの圧力によるものであったという。

日本は、事実上の戦後賠償として、60年間に、約42兆円のODAによる国際貢献を果たしてきた。太平洋戦争に関係のなかった所も含め、その範囲は190カ国・地域に及ぶという。アジア<sup>32</sup>、中南米<sup>41</sup>、大洋州<sup>20</sup>、中東アフリカ<sup>72</sup>、欧州<sup>25</sup>か国・地域である。南米チリ産サケは日本の養殖技術援助によるもので、最初稚魚放流を試みたが、回帰率が悪いので、海面いけす養殖に切り替え、年間70万トン。ノルウェーに次ぎ世界第2位の規模。タンザニアでは日本式のきめ細かい稲作で、粳ペース200万トン生産(2012年)され、今やアフリカ各地にその技法が普及しつつあるという。

フィリピンは第二次世界大戦で110万人の犠牲者が出たが、日本は200の橋の建設など、ODA総額3兆円の供与で対日感情の改善に役立ち、非常に感謝されている。しかし韓国には地下鉄など総計6700億円の援助に対し、当初非常に感謝されたが今では日本企業進出のための呼び水に過ぎなかったと悪口の言い放題。中国で1984年、164億円を援助して建設した「中日友好病院」は世界最先端の病院で、非常に感謝されていたが、これまた今では名称から「友好」の字を削除。顕彰碑は撤去されたという。いかに己の政権基盤の維

持のためとは言え、国内世論を纏めるため、仮想敵国扱いするとは情けなや。

「援助すれば憎まれる」とよく言われる。「あいつ金持ちのくせに、たったこれだけしかオレに援助してくれなかった」というのは世の常。個人にしる、国同士にしる、これだけモラル・ハザードが広がれば、正に世もお終い。

【特別企画】

打田昇三の『私本平家物語』

巻第三(二・二)

有王(ありおう)のこと

「成らぬ堪忍(かんにん)するが堪忍」という諺もあるから、平清盛が流罪にした三人のうち俊寛僧侶だけを許さなかったというのは意固地に過ぎた判断であった。極言すれば是に依って平家に対する世論が逆風になったことも否定できない。この章段は、俊寛に奉仕していた有王という者が主人の身を案じて流罪地・鬼界が島を訪れる話である。原本は「去る程に、鬼界が島へ三人流されたる流人、二人は召し返されて都へ上りぬ。俊寛僧都一人、憂(うれ)かりし島の島守に成にけるこそうたてけれ」で始まるのだが、此の短文の中にある「憂かりし」は、衣食に欠ける(成程許された後は平教盛の援助も無い)孤島に置き去りの辛苦の様が結実された表現なのである。

その頃、俊寛僧都に仕えていた有王という名の従者が居た。原本に「童(わらわ)」とあるが是は必ずしも少年では無かったらしい。僧侶に仕えるので髪を

童形にしていたものと思われる。有王は幼い頃から仕えていたのである。源平盛衰記では三人兄弟で仕えていて、長兄は法師になったとしている。その有王が「鬼界が島から赦免された者が来る」という噂を聞いたので、船が着く鳥羽まで行ってみたけれども主の姿は見え無かった。

船から降りて来た役人らしい人物に「俊寛僧都は？」と尋ねると「それは罪が重いので許されず島に残された」という無情な返事が返ってきた。悲しいことは言うまでも無いが、それならば次に赦免されるのは何時頃なのか？何か情報は無いのかと聞いて回ったが全く得るところが無い。

そこで俊寛の娘がひっそりと暮らしている所へ行き「此の度の恩赦には漏れて、お姿を見る事が出来ませんでした。詳しい様子が分かりませんので私は自分で島に行つて確かめようと思います。(お父上あての)手紙を書いてください」と申し出た。娘は絶望して泣くばかりであったが、ようやく俊寛僧都宛ての手紙を有王に託した。

有王は自分の父母に計画を話せば無謀なこととして止められることが分かっているから、是を知らせずに鬼界が島へ密航？することにした。その頃、平清盛が中国(宋)との交易に使っていた船が大阪から瀬戸内海経由、九州に行っていたので其の便を利用してしようとしたのだが、出航が春から初夏にかけてと言われたので、それを待ち切れず三月末に都を出て、あれこれと船便を利用しながら、ようやく薩摩の国まで来ることが出来た。

薩摩では地域の人たちに怪しまれ着衣を剥ぎ取られたりしたけれども気にすることなく、俊寛僧都の娘から託された手紙だけは髪の中に隠して護り通した。ようやく鬼界が島へ行く一艘の商人船に乗るこ

とが出来て目的地の浜辺に降り立った。見渡せば都で微かに聞いた島の噂とは違ひ物の数にも入らない程の孤島で田も無く、畑も無く、村も無く、里も無く、僅かに見掛ける人は居ても話している言葉は聞いても意味が分からない。

辛うじて一人の者に行き会い言葉を掛けてみると「何か？」と反応してくれた。「此処に都から流されて来た法勝寺の執行（しゅぎょう）事務長」をされていた御坊と言う方を知りませんか？」と訊ねてはみたが、白河上皇の勅願寺であった法勝寺のことも執行のことも、都では兎も角、絶海の孤島の住民が知っている筈が無いのである。

人影はまばらな海岸のことで、ようやく見掛けた者に聞いてみると「詳しくは知らないが、三人で居たのだが二人は都に呼び戻されて、残された一人はあちらこちらと島の中を彷徨い（さまよ）歩いていただけども、今は何処に居るか分からない！」という返事であった。有王は島内の地理を知らないのので、取り敢えず山中を探すことにして手近な所から峯を攀（よ）じ登り、谷底に下りして歩き回った。絶海の孤島であるから山は白雲に隠れて往來の道も無く困難な搜索を何日も続けたが無駄であった。山中には居られぬものと、海岸付近を捜すことにした。それも鷗が砂浜に足跡を付けるか、沖に浜千鳥が舞うのが見えるだけで尋ねるお人は見つからない。

そうした中で或る朝、浜辺を歩いていると磯の方からトンボのように痩せ細った男がよろめきながら来るのが見えた。元は法師でもあったのか髪が天に延びるように生え、それに多くのゴミや藻（も）が取り付いて茨を被ったようであり、手足はやせ細って関節が現れている。着衣は黒く汚れきって元は上等な絹であったか木綿であったのか分からない。その

者が片手に流れ着いた海藻をぶら下げ、別な手には魚を持って、歩いてはいるのだが足元がフラ付いて思うように進めない。

都の物乞いでも、この様に惨めな者は見たことが無い。法華經には「諸々の阿修羅（悪神）は大きな海辺に棲み、惡道（地獄・餓鬼・畜生）は深山大海の畔（ほとり）に有り」と説く。私は知らぬ間に、その空間に落ちてしまったのであるうかと、思うほどに双方が近づいた。有王は此の様な者こそ、我が主の行方を知るかも…と思いついて「訊（たず）ねたい事があるのだが…」と声を掛けた。流人の実態を知らない有王は、俊寛が粗末ながら普通の暮らしをしていると思つたのであろう。「此の地に都から流された法勝寺執行の御坊の行方を御存じでは有るまいか？」と言えば、有王は変わり果てた俊寛を別人と思つたけれども俊寛の方は、どうして忘れることが出来ようか、「此処に居るのが俊寛ぞ！」と言いつわらぬうちに手に持っていた魚と海藻を投げ捨て、駆け寄ろうとして砂の上に倒れ伏した。有王はこうして俊寛僧都を見つけることが出来たのである。

有王は氣を失つた主が死んでしまったものと思ひ膝の上に載せて「有王が参りました。多くの浪路を凌いで此の地に参りましたのに、その甲斐も無く、どうして私に辛い目を見せるのですか…」と泣く泣く叫べば、少し経って氣が付いた俊寛は有王に助け起こされ「そなたが此処まで訪ねてくれた志は誠に神妙である。明けても暮れても都のことだけを思つていたから恋しい者たちの面影は夢に見たり幻に現れたりしていた。身体が弱つてきてからは夢も思うように見ることも出来ず、今そなたが現れたのも夢としか思えなかつた…もし此の事が夢であつたならば、覚めてからどうしたらよいであろう…」と心細

げに言う。

有王は声を大きくして「夢では有りません。確かに有王が此処に居ります。それにしても、この様にやつれたお身体で是までお命が延びさせ給うこそ不思議です。よくぞ生きてこられました！」と言えば、俊寛は「…それが、昨年（去年）に少将と判官入道に置き去りにされてからは頼る者も無くなつて心細くなつたことは分かるであろう。いっそのこと、海に身を投げて死のうとしたけれども、別れに際して少将が「都からの便りを待て」などと慰めの言葉を残した（巻三「冠搦」で藤原成経が清盛に嘆願して見る、と言つた）言葉を愚かなことながら当てにして、何とか生き長らえようとした。この島は食糧が無いところであるから、体力のある間は山（噴火山）に登つて硫黄（いおう）を採り、それを九州から来る商人に渡して食糧を貰うような暮らしをしていたけれども、少しずつ体力が弱つて硫黄取りも出来なくなつた。

今では天氣の良い海の穏やかな日には浜に出て漁師や釣り人に物乞いをして魚を貰い、干潮時には浜辺の貝を拾い、海藻を拾い、磯苔（のり）を採つたりして飢えを凌いだ。海の恵みで辛うじて命を保つたのである。その様にしなければ、此の孤島で生きてはいけない。他にも話すことが山ほどあるが先ずは我が家へ参ろう…」と、思いがけないことを言われた。

この様な姿なのに家が在るとは不思議だと思ひながら俊寛を抱えるようにして行くと、浜辺の松林に生えた竹を柱に、流木などを葦で結び着けて桁（けた）にした上に、こぼれるほどの松の落葉を載せた家？が在つた。この様な住まいではとても雨風は防げたものではあるまいと有王は思う。

かつて、此の法師は法勝寺の事務職（事務長に相当す

る執行（しゅぎょう）であり、寺院の領有する八十余名の莊園を管理されていたから破風造りの門が在る建物から平屋まで多くの事務所に勤務する四、五百人の者たちに取り囲まれて不自由のない日常を過ごして居られた。法勝寺は承暦元年（一〇七七）に京都に創建された白河天皇の御願寺六か所のうち最初最大の各宗派を総合した大伽藍であり、寺院としても格式の高い寺なのである。（応仁の乱で焼け延暦寺に吸収された）有王は、その御人が絶海の孤島で物乞いのような暮らしをされている姿を見て心から哀れに感じながら人間の業を思っていた。

業には、今生の業が齎す果報の遅速に依って様々な形がある。先ず現世で受ける「順現業」、次の世に果を受ける「順生業」、そして次の生を受けたときの「順後業」である。此の僧都（俊寛）が生涯の間（捕えられる迄の間に職務上で受け取った金品は多かつたが何れも本来は寺のもの、仏のものであった。つまり職務上で甘い汁を吸っていたことになる。信者からの贈り物を受け取りながら、報いる功德も積まず、心に恥じることも無かつたために現世で報いを受けたのであろう。

原本の順序どおりに書いているが、最後のほうは主人思いの有王が優しくしたのに、俊寛が悪徳官僚並みに表現されてしまった。次の章段は「僧都死去」であり結局、俊寛は生きて鬼界が島を出ることが出来なかつた。気の毒ではあるが、平家物語の作者にも見放されたことになる。

#### 僧都死去（そうずしきよ）のこと

有王の訪問を夢かと思っていた俊寛も、ようやく

現実であると気づいて、先ず「去年に少将や判官入道を迎える船が来たときには、家族などの手紙が届けられたものだが此の度、そなたが渡つてくる際に（私の家族から）手紙を預かつて来なかつたのか？」と質問した。有王は、その言葉に胸をつかれて、また新たな涙が出て来た。それを隠す為に暫くは下を向いていたが、少し経って顔を上げ涙を抑えながら言った。

「貴方様が平家屋敷に連行されてから間もなく、役人たちがやって来て、身内の方々を逮捕し罪状を糾明すると言つて何処かへ連れて行きました。其の後の消息は分かりません。（原文では「御謀反の次第を尋ねて失い果て候ぬ」となっていて殺害されたような印象を受けるが、処罰対象者として記録されているのは共同謀議参画者だけであるから俊寛の使用人は事情聴取後に釈放され、どこかに身を隠したのであろうと思う）北の方は幼き人を、やつとの思いで連れ出して鞍馬の奥に忍び暮らしをされてしまいました。私だけが時々お伺いして身の回りのお世話をしておりますが、御家族のお嘆きが深く特にお子様がお父君を慕う余り、有王よ、鬼界が島とやらへ私を連れて行つてくれないか」と無理な仰せをされてばかりおいででした。ところが、去る二月に瘡（もがき）に罹つて亡くなられました。北の方は、俊寛僧都の安否に加えてお子様を亡くされた悲しみから生きる氣力を失われ日々にお身体を弱らせておいででしたが、同じ月の三月二日に、残念ながら儂く（はかなく）なられました。今は、残された姫様だけが奈良の伯母上様のところに移つて居られましたので、此処にお文を頂いて参りました。」

そう言つて有王は肌身離さず護り通して来た手紙を俊寛に差し出した。開いて見れば、正に有王が述べたとおりの辛苦の程が書き連ねてあつた。

手紙の文末には「どうして三人が流罪となつて、其のうちの二人が許されたのに、父上だけが島に取り残されたのですか？」と小学生でも持つような素朴な疑問が記されていた。そして「身分とか地位とか責任とか言う難しいことは私には分かりませんが、出来ることならば、鬼界が島というところに私も行ってみたい氣持ちです。それが出来ませんので取り敢えず有王を向かわせます。願わくば有王を供にして帰つてきてください」とある。

俊寛は其の手紙を顔に押し当てて暫くは物も言わずにいたが、少し経つてから手紙を有王に見せるように差しだして言った。「有王よ、是を見よ。此の子が手紙に書いたことは、世間を知らず未だ幼稚であつて、有王を連れて都に戻れ」とある。其れが出来ない身が悲しく恨めしい。自由になる身なれば、どうしてこの様な島に三年の春秋を送つていようか。娘は今年で十二歳になる筈だが、是ほどに世間を知らなくては（俊寛が流された理由も知らぬようでは）人妻になつたり宮仕えをしたりすることも出来ぬのではないかと涙を流された。後選和歌集に藤原兼輔の歌：「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひ（迷い）ぬるかな」がある。

俊寛は言葉が続ける。「此の島へ流されて後は曆も無いから月日の替わりゆく様子を正確には知らず、自然に花が散り、葉が落ちるのを見て春秋を知るばかりである。蟬の声がして麦が実れば夏と思ひ、山に雪が積もれば冬と覺り、月の変化で一か月の経過を承知する。其れに依つて指折り数えてみれば、今年には六歳になると思つていた子は幼くして既に先立ちており、手紙をくれた娘は、私が西八条の屋敷から離れる際に一緒に行くことせがんでいた。それを直ぐに帰つてくると有（なだ）めておいた。その情景が

今のようによろこぶ。(この様な場所に流されて)あれが最後の別れと分かっていたならば、今少し顔も見て置きたかった。親となり子となり夫婦の縁を結ぶも、みな此の世だけの契(ちぎり)ではない。けれども、それらの縁がバラバラになって、年齢の順にはなく幼い者が先に死ぬことを夢幻にも知らなかった。私は、この島に一人居て、どの様にしても命長らえようと思っていたが、それは妻や子に今一度、会うことを望んでいたからである。都に一人だけ残された娘のことは気掛かりであるが、元気でいれば何とか生きて行けるであろう。妻や幼子の亡くなったことを知った今は、私が辛い暮らしに耐えて嘆きながら生きていつて自分に憂き目を見せるのも意味の無いことになった。それは、辛いこともある」と言いつて、其れで無くても粗末であった食事を絶ち、ひたすらに念仏を唱え阿弥陀如来の名を呼びながら過(こ)した。

有王は、その様な主に付き添って二十数日を過したが、遂に粗末な庵(いおり)の中で俊寛は消え居るように息絶えた。享年三十七歳という。

有王は虚しくなった主の身体にすがり、天を仰ぎ地に伏して無き悲しんだけれども、死者は生き返る訳ではない。「此の俛、冥土の旅にお供すべきではありませんが、都に姫が御出でになるばかりで、俊寛様の御供養をなさる方も居られない以上は、私が暫くは生き長らえて菩提を弔い、ご冥福をお祈りしましょう。…」と言いつて、俊寛の遺体を寝床に置いたまま、庵の周りに枯枝や落ち葉を集めて火を掛けた。茶毘(たび)の煙は塩焼きの煙に似て空に昇つていった。遺骨を拾い集めた有王は、それを布に包んで首に掛け、島に来た商人の船に乗せて貰つて九州の地に着いた。

それから急いで都に戻り、俊寛の娘の許を訪ねて鬼界が島での一部始終を詳しく知らせたのであるが、俊寛は返事を書けなかったから「何しろ島には硯も筆もありませんので、御返事のお便りは頂くことが出来ませんでした。が、姫君のお便りを讀まれて御心は通じたと思います。しかし俊寛様の御心の中をお伝えすることが出来ないのは残念で悔しく思います」と涙ながらに報告した。聞いた姫は、余りの事に、その場に伏して嘆き悲しみ声を惜しまず泣き叫んだ。この女性は十二歳で仏門に入り、奈良の法華寺(天和国の国分尼寺)に居て父母の後世を弔つたということであり、誠に哀れである。有王は鬼界が島から持ち帰つた俊寛の遺骨を、娘から託されて高野山に登り、弘法大師の廟(びょう)が在る奥の院に納めて貰つた。そして奥の院の入口に当る蓮華院で法師となり諸国修業をして主である俊寛僧都の後世を弔つたと言われる。章段の最後に高野山が出て来たことで此の話が「平家物語」本来の姿とも言うべき「唱導説話」であったことを専門の先生方は指摘する。何しろ被害者と言いか話の主人公が高僧であるから、それに応えるように原本は「…斯様に人の思い歎きの積もりぬる、平家の末こそ恐ろしけれ」で締めくくる。平家物語も少しづつ平家離れが進んでくるのである。

#### 颯(つじかぜ)のこと

此の章段はオマケのようなもので極めて短い。

俊寛死去と同じ年(実際は翌年らしい)五月十二日の昼頃、京都に竜巻が起こり多くの被害が出た。風は中御門京極から南西に抜けて家々を粉碎し空に舞い上げた。轟音は地獄の風となり家屋を粉碎したばかりか多くの人々の命を奪つた。牛馬の犠牲も数え切

れない。是は只事では無いと国の最高機関で占つたところ、百か日のうちに身分の高い大臣などの慎みごと、さらには天下の大事、そして仏法と王法が傾き戦乱の世が続く…とされた。政府の専門機関である神祇官も陰陽寮も同じような答えを出したのである。

次からは全盛を誇つていた平家に良からぬことが起き、先ず大黒柱の平重盛が病いに伏す。

ふるさと風の会では、皆さまからの投稿をお待ちしています。内容に制限はありません。住所・氏名・筆名・E-mailを明記のうえ編集事務局へご投稿ください。25日×切で、翌月5日に掲載いたします。9月5日は5日発行予定です。

## ふるさと風の会

アレシシ書屋・書業会席料理のお店です。

(ギター文化館通り)

看板娘(大)「つひら」ちゃん

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-24-0000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>